

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと 風

第178号（2021年3月）



白井啓治

（十七）春は泥んこの気分

（2009年3月12日）

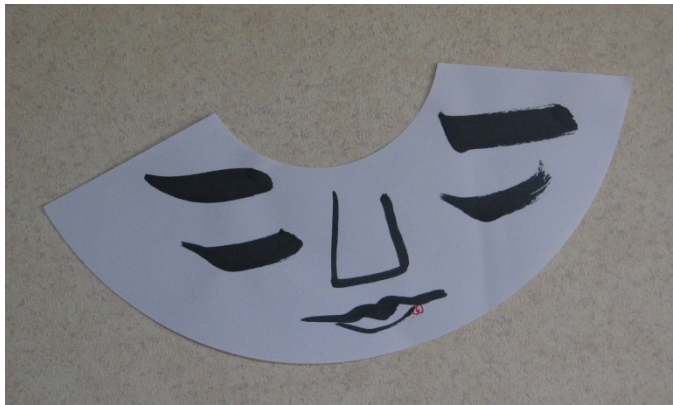
『春の窓の向こうで微笑んでいる まあ〜ただよ』

冬から春への変化ほど愚図愚図と期待だけを大きく持たせながら移ろっていく季節はないだろう。特に近年は、温暖化の所為で冬の厳しい静謐さが失われた分だけ、春の訪れ方が愚図愚図しているように感じられる。元気が良いのは、スギ花粉だけではないだろうか。

部屋の中がやけに寒いなど思つて暖房をつけ、洪々の思いで郵便物を取りに外に出ると、外はとんでもなく暖かかったりする。実に嫌な気分である。そして、嫌な気分の分だけ思考も愚図愚図と嫌なことを思ってしまう。

春が来たのだから、パツと恋をして、などと思つてもみるが気分は恋などはほど遠く、減入るような事ばかりが持ち上がってくる。これも歳の所為かなと、諦めを唆す声が心に聞こえてくる。まったくこの春の季節の移ろいには鬱陶しさが感じない。

大阪に生まれたのであるが、疎開で母方の北海道に行き、それ以後高校を卒業するまでズーツと雪国に過ごした。雪国に暮らしていると春の訪れが待ち遠しいと思われるだろうが、どっこいそうではないのだ。



（絵：兼平智恵子）

風がぬるみ、雪解けになると泥んこの季節がやってくるのである。実に鬱陶しい季節なのだ。町中は別にして、舗装の無い小道などは今もそうである。長靴の底に泥の団子がこれでもかというぐ

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32 （木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

らいこびりつき、時折跳ね上げた泥が長くつの中に入ってくる。実に不愉快なものである。しかし、その分大地が乾くとすべてのものが一斉に芽吹き花々が開く。その部分だけは美事である。そして、とんでもないハイな気分にもなってしまう。酸土手に伸びてきた草々のすべてを口に入れる。酸いもあれば甘いものもある。苦いのも辛いものもある。だがこれは春というよりも新緑の初夏。夏のはじりはじめだ。春の始まりは矢張り鬱陶しい泥んこだ。

（本稿は故白井啓治氏が常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘り掲載されたエッセイを載せています。）

5.1 峰寺山西光院 石岡市吉生

最初にこの寺を訪れたのは、真壁から石岡に来るまで上曾峠を超えてきた時に、途中で「関東の清水寺」の看板があり、立ち寄りてみることにしたのが最初でした。

正式には峰寺山西光院(さいこういん)という寺で山の中腹に建てられたとても眺めの良い場所にあります。清水寺の名前は寺の本堂が京都の清水寺と同じような懸造りで建てられていることからです。これは県の文化財(建造物)に指定されており、廻廊からの眺めがすばらしいのです。残念ながら最近はこの舞台の周辺での撮影は禁止されているようです。ここに載せた写真はその前のものです。この寺の名前は平安時代の初期に徳一法師がこの地で西から光が差すのを見て、西方極楽浄土を祈願して、ここに寺を建てたことに由来するといわれています。

峰寺として広く知られる西光院は、平安時代初期・大同2年(807)徳一大師の開山と伝えられ、はじめ法相宗であったが鎌倉時代に一時真言宗となり、のち天台宗に改宗した。本堂は本県では類例のない懸造りで県の文化財(建造物)に指定されており、廻廊からの眺めはすばらしく関東の清水寺の名に恥じない。この寺の約6mもある立木観音菩薩像は、桧材寄木造の巨像である。なお、境内西方にある球状花崗岩(俗称小判石)は県指定天然記念物である。(入口にある案内板)



懸造りの回廊

京都の清水寺の舞台と同じ様な懸造りであるが、違いはこの寺が山の中腹に建てられていることである。廻廊からの眺めはすばらしい。東筑波ユートピア(さるなどの動物公園)が隣接しており、新緑や紅葉の時期に天気の良い明るい日に訪れてください。



木造立木観音菩薩像

木造立木観音菩薩像があります。

自然石の観音像を本尊とするこの寺の本堂は関東の清水寺と呼ばれ、岩棚状の細長い敷地の奥の崖に懸け出して建てられた懸造りの建物で、岩肌には脚柱を建て舞台型を作った上に、桁行三間梁間三間寄棟造り瓦棒鉄板葺(もとこけら葺か)の本体を組んでいる。

この本堂は崖の表面に作り出された巨大な石仏の上半身をおおうように作られた珍しいもので、現在の建物は江戸時代末期頃と推定されるが、石仏が火災にあつてるところから、前身堂が焼失したのが判り、寺院の創立は相当古いとみられる。

またこの寺には、立木仏とよばれる十一面観音立像が祀られている。これは徳一法師の創建と伝えられ、像内にある元文二年(1737)の修理墨書銘札によると、本来ここにあったものではなく、もと山麓 吉生(よしゆゑ)村の立木山広照院長谷寺に伝来したものらしい。像高597cm。弁形(べんけい)刻出の天冠台上化仏から腰裳の下四分の一位まではハリギリ材の一木造、頂上仏をほぞ差し、両臂・両肘 矧付(はぎつけ)、頭・体部とも内刳(うちぐり)を施し、背板をあてている。像は雨にかかったせいか、像表面が荒れ、当初のノミの痕を見ることは出来ないが、そのずんどうの体軀のとらえ方、後補とはいえ、台座をつくらず自然木の根を矧付けている点など、本来立木仏として造ら

県指定有形文化財に西光院本堂(建造物)と

れたことを伝えている。製作年代は平安時代末、十二世紀頃のものである。〔石岡市教育委員会〕昔から牛馬などの信仰の寺として、正月の市が開かれ、近隣からこの山を牛馬などで登ってきたといえます。しかし、農機具に牛・馬が使われなくなり次第に静寂になりました。茨城百景の指定（峰寺山）を受けています。



廻廊からの眺め
八郷、石岡方面が一望できる。

5.2 上曾峠と上曾宿

石岡（府中）から柿岡の街を通り、真っ直ぐ真壁の町に続く県道7号線は、昔の主要な通りであった。真壁側から石岡（府中）に行くにはこの上曾峠を越えていく必要があったのである。その峠を越えた所にできた宿場町が上曾宿で、古い町並みが今でも残されており、旅籠の看板も2件そのまま残っている。歴史を調べてみると、かなり古くから重要な街道であったという。昔は霞ヶ浦の高浜から柿岡までは恋瀬川

を使って舟運が発達していたようで、柿岡から真壁・下館方面への荷物の運搬はこの柿岡まではこの上曾峠を越えて馬で運んだ。このため、この上曾宿には多くの旅籠があり、馬止もありました。また山中に、鎌倉時代の猿壁（さつかべ）城跡があり、小田氏の子が上曾氏を名乗ったといえます。宿場から上曾峠に向かう。ここから道がくねくねとした上りとなる。冬場は凍結して危ない。現在この峠にトンネルを作る計画が進行している。



旧旅籠「えびすや」さん
看板をそのまま残している。

今でも立派な塀と門を持った家が多くみられる。昔の宿場が思われる。

上曾宿の中段に「一言稻荷神社」があり、赤い旗が目を引きまします。神社には「筑西市」や「下館市」などの奉納者のお名前が多い。宿場の中に「足尾神社の鳥居」が残されている。後ろの方に見えるのが「足尾山（万葉集では葦

穂山）」山頂には足尾神社がある。



足尾神社の鳥居：正面に「西まかべ道」右側には「あしを道」、裏には「享和甲子歳三月」と書かれています。（享和4年(1804)3月建立）

我が労音史（28）

木下明男

20代に参加した労音運動は、1970年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

2008年の社会情勢と音楽状況

ヒ素入りカレー事件（和歌山）で4人死亡63人中毒。戦後最大のマイナス経済不況、完全失業率過去最悪となった。金融ビッグバンが始まる。全国146銀行の不良債権総額は76兆7000億円と大蔵省が発表した。長野県で冬季オリンピックが開催され、日本チームのメダル数は、金5・銀1・銅4の成績だった。

欧州通貨統合「ユーロ」に11ヶ国（3億人）の参加が決まり流通が開始された。インド・パキスタンが相次いで地下核実験を実施した。インドネシアで、死者1000人以上の暴動が起き、スハルト大統領が辞任をした。北アイルランド和平合意される。米英軍がイラクを大規模攻撃。

この年、ガーシニイン（米）生誕100年にあたり、世界各国で様々なイベントが開催された。佐藤美枝子（ソプラノ）がチャイコフスキー国際音楽コンクール音楽部門で第一位を獲得した。三宅春恵（ソプラノ）が80歳記念独唱会を開催した。こんにやく座がオペラ「吾輩は猫である」を創作上演した。小澤征爾指揮サイトウ・キネン・オーケストラにより、ブーランクのオペラ「カルメル会修道女の対話」が上演された。

この年逝去された著名な音楽家・文化人・石丸寛（指揮者） 淀川長治（映画評論） 黒澤明（映画監督） 木下恵介（映画監督） 石ノ森章太郎（漫画家） 水谷達夫（ピアノ） 武原はん（舞踊家） 鈴木鎮一（ヴァイオリン） 寺原伸夫（作曲家） 吉田正（作曲家） 高橋竹山（津軽三味線） 中河原理（音楽評論） 加太こうじ（庶民文化研究） 山本茂美（作家） Fシナトラ（米歌手） ヘルマンプライ（バリトン）

1998年の労音の動き

第46回総会は、固定会員目標数の達成を目指し、運営委員会や委員会の充実と健全財政の確立、会場・音楽事務所・音楽団体との協力を深め、有利な条件での企画作りと共同企画等を方針として活動を進めた。固定会員制度は、ポピュラー2会場（北とびあ・ゆうぼうと）とクラシック1会場（東京文化会館小ホール）が、昨年より開始した東部・

都下・東葛に続いての開始。各会場での実数は、北とびあが124名（200名目標）、ゆうぼうとが254名（500目標）、東京文化会館が27名（100名目標）、東部259名（500目標）、都下274名（500目標）、東葛509名（800目標）と全ブロックが未達成に終わる。

その要因は、一般券扱いが主要になり会員拡大の取り組みが徹底できなかった。それでも、北とびあは城北ブロックが、ゆうぼうとは南部ブロックが担当し、実績を重ねている最中。本部では、登録会員のチケット発送や会費入金管理で手いっぱいになりフォロワーが出来ないでいる。東京文化会館所ホールに関しては、プロジェクトが組み切れず、動き出せない状態。新しい動きとしては、練馬文化センターの新設が地域との連携により準備されている。安定した例会運営には「固定会員制度」の活動が欠かせない。会員募集のリーフレットやチラシ裏を有効活用し広範な宣伝を仕掛ける。会員としての自覚を高め、メリットを感じさせ、お知らせとフォローをする。例会を丁寧なまじめ、次の例会へと生かし、「会員募集・会員拡大」を中心に据えることが確認。また、北とびあ会場では、地域のニーズに合わせ改良していく柔軟性を持つ。企画→運営→実施→総括との流れの中で、事務局と運営委員が情報を共有し取り組む。経営体と運動体の二つの顔を持つ、都市部の実情を「固定会員制度」に依拠して作ることが確認された。

この年の第九は、新星日響と若手指揮者の佐渡裕での取り組みになった。佐渡裕の魅力と、初心者歓迎の新聞広告もあり、350名の合唱団が組織。改修工事で使えない東京文化会館を止め、初使用の会場「すみだトリフォニーホール」公演となる。初参加が多い合唱団、練習期間も短かったが、新

しいメンバーの活躍で会場を満席にできた。「錦織健コンサート」は、初使用の会場「東京オペラシティ」で、人気の高さもあり満席で成功した。

東京での共同企画「鬼太鼓座」は、浦和・八王子・松戸・葛飾・五反田の五ヶ所で取り組み、太鼓グループ「鼓童」と比較されるが、明るくユーモア溢れるステージは、鬼太鼓座の特徴として、楽しいコンサートになった。東葛ブロックでは、「野村狂言の会」を二公演（松戸・市川・八千代）定期的に企画し、全部を成功させた。初代竹山亡き後、二代目（元竹与）とともに、竹童も積極的に取り組む。（6公演）豪快さと繊細な撥捌きと軽妙なお喋りは、竹山を彷彿させた。毎年着実に好評さが増し、若いファンも増えている。八郷のギター館公演も3年目を迎えた。

「高石ともやとザ・ナターシャ・セブン」例会は、15年ぶりの例会となる。根強いファンの要求は高く1000名近くの会場はすぐ満席になった。ファンは、30代後半から50代までの方が多く、懐かしさだけでなく希望と活気のあるコンサートになった。25年ぶりに復活した「トワエモア」も大好評で、北とびあと松戸森のホール会場は満席になる。その他のポピュラーコンサートは「由紀さおり・安田祥子」は5回、「美輪明宏音楽会」は3回、「布施明コンサート」は5回、「西城秀樹コンサート」は3回取り組む。何れも好評で、組織的にも安定した取り組みになった。記念コンサートとしては、デビュー45周年を迎えた「菅原洋一コンサート」をオーチャードと練馬文化で取り組み成功させた。

「HIROSHI」「野村狂言の会」「高橋竹童」が小例会として取り組んだ。特に「HIROSHI」は、昨年度

心部(300~500席)で7会場成功の実績の上に立ち、今年は東部・東葛が加わり10会場を成功させる。彼の巧みな演奏と気取りのないお喋り、奇抜な衣装の楽しさもあり、観客の心を捕らえて益々広がりを見せている。海外アーティストは「ブラターズ」(パルテノン多摩・浦和文化・北とびあ)「アダモ」(市川・柏・春日部)を取り組んだ。知名度はあっても、何れも財政的には厳しく困難な状況であることを痛感する。全国共同企画は、ユーゴスラビア民族アンサンブル「フルーラ」を招聘。ユーゴは、コンボ紛争で大変な状況にあり、来日時も緊迫状態。メンバーは出国出来なくなることを考え、出発予定10日前からヨーロッパを転々として、アムステルダムから無事来日のできた。東京・関東を中心として「公演を取り組む。何れの会場も大好評、美しい民族衣装でダイナミックさとロマンチックさを併せ持つダンス、ユーモアいっぱいのおークストラ、ジプシーバイオリンのもの悲しさ等々が観客を楽しませ、交流会も各会場大盛り上がりで、高い評価を得た取り組みになった。

各センターの状況は

●R.s.アートコート企画は、20ステージが取り組まれた。中でも「宮間利之とニューハード」は年3回の企画も定着し全て満席で成功。しかし、会館貸し出し益は10%ほど減少。

●十条会館は、貸し出し益は昨年を上回り、目標達成。合唱団や定期使用団体で稼働率が上がり、また使用者らによる八十条まつりも年々協力者も増えている。ダンスパーティーやダンス教室、大人のためのピアノ教室等々、地域に根差した労音のセンターとしての役割を果たしている。

●お茶の水センターは、利用率・貸出収入ともに昨年を上回り目標を達成。利用者との協力・交流も深まる。●南部センターは、太鼓教室の活動が増え、事務局員の常駐(木下)で活性化し、委員活動家の集中が高まった。南部センター活用案内パンフを作成し、諸団体へのオルグでより有効活用を目指している。

●東部センターでは、センター例会を16回企画。地域文化活動の事務局を担い、「ぞうれつしゃ合唱団」・「足立うたごえ祭典」も大きな力となった。

●八郷ギター館の年間入場者は2800名(5%減)だが、グッズ商品の売り上げで黒字財政を保っている。

今年度の原水禁世界大会に東京労音として3名の代表を送る。インドとパキスタンの核実験により、新たな核戦争危機が生まれている。大会では、新しい世紀に向け前進する方向と展望を明確に、インドとパキスタンの代表も携え、被爆者と連帯して核兵器廃絶の共同声明を発表した。「夏の交流会」は、式根島で東京労音全体の取り組みにし、昨年を上回る61名が参加。実行委員会の丁寧な準備と地域の取り組みで成果を上げた。来年は80名を目標に再度式根島で開催を決定。「冬の交流会」は、越後湯沢で29名の参加で開催、来年は蔵王で開催することを決めた。

全国労音の動きは、第43回全国会議を「ホテル清晃苑」(日光)を会場に、39団体94名の参加で開催。八戸労音が解散し東北ブロックの危機が報告された。今後の連絡会議は2年ごとの隔年開催とし、空き年度には全国交流会の開催を決めた。

(つづく)

石岡市指定文化財(三十一) 兼平智恵子

古墳とは何かと問えば、昔の人の墓、古代人の墓地、それも盛り土をして築いた「塚」と答える人が多い。その答えは古墳の外観を示すものであって、確かに間違いではないが、その説明では古墳そのものの有するすべてとはいえない。だが、いかなる目的をもって記念物といえる構造物を築き、後世に伝え残そうとしたのか。それらのことを古墳の構造的な特徴や、古墳に埋葬された副葬品などをとらえて古墳のどのような特色を通じ、古墳が築かれた時代における日本の社会や文化、さらには、人びとの生活がどのようなものであったのかを理解し得て、はじめて古墳とはなにかという答えになるのである。八郷町史より一部抜粋

今回の石岡市指定文化財のご案内は八郷地区に存在する石岡市で最も古い前方後円墳、佐自塚古墳です。

佐自塚古墳(築造年代四世紀後半~五世紀初頭)

史 佐 久 一七〇

史 跡

昭和四三・三・一五指定

ぐるっと四方山々に抱かれ、レンガ色のおしゃれな洋風建物の石岡市八郷総合支所からの出発です。ここから北方に約1km、勿論今回のご案内は徒歩でまいります。

まず、庁舎から「古代散策ロード」のパンフレットをお求め下さい。このパンフレットは石岡市内の石岡駅前観光案内所をはじめ、まちかど情報セ

ンター、まち蔵藍、各公民館などでも求められま
す。

案内図の通り、ここ柿岡・佐久地区は古い時
期の古墳（前期古墳）が多く存在し、「常陸屈指の前
期古墳の集中域」と注目されてきました。図中の
多くの古墳の中から右上、現在は市指定「佐自塚
古墳」を指します。案内図には古代散策ロード
として赤色で示されていますが、今回の私の案内
は健康上ウォーキングも兼ねていますので、支所
の西側出入口からの出発です。右折し間もなくの
信号を左折（真つすぐ進むと県指定丸山古墳へ）、前進、車
に気をつけながら丁字路右折、主要地方道土浦・
笠間線にでます。前進、小川橋を渡り前進、間も
なく右にざわめき橋がみえてきます。そこを渡れ
ばやはり丸山古墳へ行く事が出来ます。更に緩や
かなカーブ前進支所からゆっくり歩いて約十五分
弱、右側に板敷山大覚寺・佐久の大杉・佐自塚古
墳の看板があり、ここを右折、恋瀬川にかかる長
堀橋を渡りますと前方に杉木立の小山。

のどかな田園を見ながら丁字路左折（右折すると丸
山古墳へ）、間もなく右側に案内板「町指定史跡 佐
自塚古墳入口」をのぼります。

説明板を中央にして左と右に高く盛り上がった丘
が、杉木立に守られ、あらわれましました。

昭和三八年発掘調査が行われ全長五八mの前方
後円墳である事が判明。後円部の中央から全長六
mを超える長大な埋葬施設が発見され、木棺を粘
土でバックした、粘土槨（ねんどかく）と呼ばれる人
念なものであった。副葬品は、玉類や竹櫛・刀子・
土器だけであったが、粘土槨の上部からは高坏（た
かつき）や埴（かん）・壺など土器が出土している。
その一部には穴が開けられていたことから、埋葬

に際して儀礼が行われたものと考えられる。墳丘
からは円筒埴輪が出土しているが、その透かしは、
三日月形や水滴形といった他に類例をみない特異
なものであった。この古墳は丸山古墳（石岡で一番
古い前方後円墳で副葬品の品々から、大和政権の大王墓である前
方後円墳と関係をもった王墓）に続く王墓で、「前方後円
墳」と言う形はもちろん、古墳の規模や高さ、埋
蔵施設からは、丸山古墳よりもさらに力を伸ばし
た「王」の姿が想像されるそうである。

はたしてこれらに埋葬された「王」はどこに住
んでいたのでしょうか。

これを解くのがかりが佐自塚古墳の近く約七〇〇
m、佐久上ノ内遺跡で見つかりました。
平成二五年、農道建設に伴い発掘調査を行った
ところ、東西七〇m、南北五〇m以上の範囲を溝
が堀のように方形に囲んでいたことにより、この
ような溝と堀の区画は古墳時代の一般集落では珍
しいもので、王が住んでいた「居館」の可能性が
高く、更に佐自塚古墳で埋葬が行われ、お供えを
行った時期に、佐久上ノ内遺跡の溝は機能されて
いて、被葬者の活動時期は溝と居館の存続時期と
重複する事となり、石岡市では初めての王の居館
発見となったそうです。

説明板辺りから古墳を背にし、かつては谷津で
あったところは現在は田園に。前景の山々は、左
側から筑波山、足尾山、加波山、板敷山、難台山
とぐるり古代の世から優しく見守っています。

参考資料 八郷町史 石岡の歴史と文化 古墳出現

○古の人に会いに一人こころ安らぐ

智恵子

年とつたもんだ

伊東弓子



ここ一ヶ月とても暖かい。乾燥しきっている。
「夕べ、サイレンなっていた。聞こえたような気
がするんだけど・・・」
と、言い出した婆さんが、あんちゃんに小言を言
われているようだった。

「枯葉を燃やしていた後、山に迄、飛び火して今
大騒ぎとなっているんだからお恐ろしいことだ。
おかあもよく枯葉を燃やしているが、よくよく
気をつけてくれよ」

全くだ、俺なんか逃げようたつてつながられてんだ
から逃げられない。黒こげになるしかないんだ。
と、うつらうつらしながら聞いていた。
そう、俺の名前は「いづみ」婆さんに飼われてい
る犬だ。

前からそうだったが、今は特に枯草を踏んで歩
くのがいい。婆さんがよく話しかける。

「そうだね。コンクリートの所より土や草の上の
方が足にいいよね。気持がいい。」と、婆さんにと
つてもそうらしい。霜柱が立っていても、夜露で
濡れていても、土や草、枯草の感触はいい。

「ほら、見て小さな花が咲いているよ。これは犬
ふぐり。陽が上ると小さな花たちが一面を青く飾
るよ」

説明を聞くより小さな葉についている水分がうまいんだ。じつくりなめてみると、

「おいしいの」

うまいからなめてんのに婆さんは聞いてくる。聞かれても上手に説明は出来ないんだ。

「うまいからなめてんだよ」

と、婆さんの顔を見上げるだけだ。

俺が走ると、ちよつと前までは身軽に走ってついてきてくれたが、この頃はそうもいかないらしい。

「待ってよ。待っていそがないでよ」

よく言うようになった。それと原因の一つに両足にあかぎれが出来たとか、それも足のひらのしわの方まで裂けて痛みが倍にもなり、直りが悪いとか友達に愚痴を言っていた。

その友は物知りで、その人が先生ならば婆さんは、小学生も低学年の子のようなものだ。

知識も不十分で人に教えることもなく、のほほんとしている。その友がワセリンをくれたとかで大喜びをしていた。

「ああ懐かしい。子供の頃お母さんがつけてくれたね」

と、やこばさんと話していた。みるみるよくなつて歩き方も気分もよくなつたようだ。ありがたいといいながら急がしさに追われ、まだ友に報告もしていないようだ。全く。

犬に会うのは嬉しい。やっぱり仲間に会うのは最高だ。おとなしい奴やメスには余裕をもって会ったり、すれ違ったり出来る。しゃれた服なんか着て気取っているものもある。姉さん犬が三匹姿を見なくなった。亡くなつたらしい。なぜか大世のわびしさを感じた。彼女と思つて居座つた家の主

人にいやがられたこともある。大きい体の奴、いばりそうに俺を見つめる奴、せいづらには黙っていられず吠えまくつてやる。出来れば飛びかかってやりたい。そんな時、婆さんは必死でつなを引く。前より力はなくなつたように思うのだが、俺も妥協しておくんだ。秋の初めの頃、婆さんの手元が狂つたのか、綱がとれたのを幸いに梨畑の奥を目指して走つた。そこで大喧嘩をし、首あたりを怪我をして家に戻つてじつとしていた。俺を見つけて「婆ちゃんも追いつけなくてごめんね。こんなに怪我して可哀想に」

と、涙を流しながら、自分のつばを指で傷につけまわしていた。それから下玉里の山や上玉里の畑にいる犬の群れには大分気を使つている。

散歩してもらえない犬が三匹いる。気の毒にも思う。飼い主はどの家も若い人一人と子供の生活。早くから夕方までの勤め、時間が無いらしい。一匹は高い台に家がある。「いつか会おうの」と、声をかけてやる。もう一匹は畑の奥の方の家、もう一匹は通りの新しい家の犬。小さな小屋に寝ているがほえるほえる。小屋まで動かして吠える。

「人間の都合で飼つて、自由も無くてあわれだね。」婆さんは声かけているが、俺はこの道は俺の方が先に通っているんだ。と思いつながら相手に気付かれないように、そつと通りすぎようとすが、せわしくなく。人に会うのもいい。婆さんの背が伸びる。男二人連れの散歩仲間が遠くから声をかけてくれる。

「いづみ、いいね。散歩はいいな。婆ちゃんのためにもいいんだよ」

「しばらく振りだな。元気か」
釣人の中にも声かけてくれる人もいる。婆さん

も笑う。大嫌いだつたご婦人が喜んでくれる。

「いづみがなついてくれて嬉しいよ」。

通学途中の子達にも婆さんはよく声をかける。が無言・無表情の子が大半だ。人間はこのままいくと、これからどうなるのかと婆さんはぼやいている。

「おりこうそうだね」

「こわそうな顔だね」

「優しい顔をしているね」

見る人の目か、心か、感じ方であれこれと批評されるが、よく言うよ。俺はおれだ！ さあ進もうと、婆さんを引つ張る。

歩いていて不愉快なのは糞だ。太くて黒いもの、細いゆるめの貧乏なもの、あちこちにある。婆さんはぼやく。

「いやだね。自分の尻の始末も出来ないで」

悪いのは、犬と犬の飼い主。しつかり躰けるよ。後始末しろよ。嘆く婆さんの傍らで、一応臭いをかいで自分の物ではないことを確認。そこへいくと俺は用をたしたあと、前足後足で土をとばし土かけをする。上手、下手はともかく

「いづみは小さい時、母さんにしつかり教わつたんだね。お利口だね」

と、言いながら婆さんは頭を撫でてくれる。俺の母さんは何処にいるんだろうと、一瞬思うがしようがない。土かけしないで歩き出した時は、「シャツ、シャツ、忘れて」と叱られる。

散歩も俺中心ばかりでなく、婆さんの配り物の手伝いも結構多い。二時間かかるとさすがに疲れるのだから途中の切り株やコンクリートに腰を下して一休みが目立つ。また近道を選ぶことも多いようだ。俺は不満だから引張りっこになる。

「散歩は一時間半以内にしよう」

と、一人つぶやいている。近頃婆さんは、立ち上がる時、座り込む時、パツとできなくなった様子がわかる。

「よく歩くから足が丈夫だね」

「自転車に乗っているから足が強いんだね」

など、言ってくれるのは嬉しいが、この頃ちよつと違う。牛乳を飲まないせいか。カルシウム不足かなど一人言を言っている。ちよつと淋しそうに見える。後姿も小さくなった。横に並んで歩くと曲がつてきたのがよくわかる。俺に話しかけてくれる時も、腰をかがめるから悲しくなる。

俺のこと大事に考えてくれてる婆さん、女気もないが、時々からみつくと、

「婆ちゃんめすじやないんだよ」

何気なくうす笑いしている。でも髪が薄くなって悲しそうなのは女だという証拠だろう。見られたくないのだろう。いつもおかしな形で頭のものっているものがある。不釣合いのものもあるが、それを直そうともせず、又そういうセンスも無いのだろう。かわいそうな姿だと見てるんだが、どうしてやることも俺には出来ない。

堤防を歩きながら一人言をよく言っている。

「和子さん元気かな」

涙を流していることもある。和子先生から教わった歴史のこと、地域のこと、沢山沢山あるんだよね。余程大切な人なのだろうと俺は想像してみる。

朝明けと共に婆さんと歩く玉里御留川沿いの堤防、夕方は道向こうの爺さんと歩く霞ヶ浦の堤防、毎日毎日が新鮮だ。あと一ヶ月たらずでお彼岸、日に日に希望へ向かっているようだ。

明日も元気で婆さんと行こう。

石切山脈

小林幸枝

石切山脈の魅力をより多くの人にお伝えしたいと思います。

大パノラマの「石切山脈」を眺めながら笠間名産の栗スイーツを味わえるカフェの営業が昨年11月14日よりスタートいたしました。

笠間市にある「石切山脈」と呼ばれる山地は、

稲田石の岩石帯です。広さは東西約10 km、南北約5 km、地下1.5 kmにも及び、明治32年から稲田石の採石がはじまり、以来100年以上続く日本最大級の採掘現場です。ここから採掘される「稲田石」は、今から約6000万年前に海底の深いところで長い時間をかけてゆっくりと冷えて固まった花崗岩の一種だそうです。またこの石は、白い色の特徴の石で、世界でもあまりない類を見ないほどの白さがから、別名「白い貴婦人」とも呼ばれています。

また、その光沢の美しさや優れた耐久性が人気を呼び、日本橋、東京駅、国会議事堂、最高裁判所などの歴史的建造物に使われています。

ここ笠間市稲田の採石場跡は、今迄100年以上の採石により独特の石屏風のように切り立つ岩盤が周りをぐるっと囲み、中心には雨水が溜まって出来たというエメラルド色の巨大湖がありま

す。実はこの湖は地図にはなく、地図にない幻の湖”として知る人ぞ知るといふ茨城の隠れた絶景スポットとして注目されているのです。

また、その見た目から「茨城のグランドキャン

オン！」とも呼ばれています。

地元笠間の観光活性化に繋げていけるよう、今後も石切山脈の魅力を全国に発信していきたいと思えます。



〈父のこと 30〉

菊地孝夫

切りよくこの辺で連載を終わりにします。長い間お読みいただきありがとうございます。いずれ一冊の本にするつもりです。

一、二年前の没となった原稿を再録してみましよう。

2月からのNHKの大河ドラマの発端は、水戸から始まる幕末らしい。

視聴しようかどうか迷っている。

従来の維新観にかかわる物語から外れることはできないだろうと思う。それでは見てもちっとも面白くはないから。

〈武士道とは〉

ハリウッド映画「ターミナル」

主演トム・ハンクス

共演女優キャサリン・ゼタ・ジョーンズ

東欧の架空の小国から来た旅行者が、書類の不備からニューヨークの空港に足止めされて、やむなく旅客ターミナルで寝起きすることになる所から物語は始まる。

間が悪いことに、母国で政変が起きてしまい、事実上の難民となってしまう。ロシア語しかできず、英語はほんの片言しか話せないの、余計にトラブルとなる。テレビのニュースを見てもほとんど意味が解らないありさま。

旅行者なのに、なぜか財布に一セントもなく食べ物にも困ったあげく、空港のカートを回収して、1台あたり25セントを稼ぎ、それでもってハンバーガーを食べる。

そこへ登場した、意地の悪い係官が、その仕事を取り上げてしまう。

困った挙句、空港のトイレの難しい改装工事にかかわる。器用な職人だったため、見事に仕上げしてしまう。

キャサリン・ゼタ・ジョーンズは、ベテランの客室乗務員。金持ちの男と不倫関係にある。

清掃係の爺さんは、始めはこの男が自分の仕事を奪いかねないと冷たい態度をとる。

食料の配達係の青年（国籍はどうやら南米の移民らしい）は、カウンターの気の強い黒人女性と交際したため、食事と引き換えに、この旅行者に彼女の身元調査を頼みこむ。

物語はハッピーエンドで終わる。

一体是のどこが「武士道」と関係あるのかとのご指摘には、こうお答えしましょう。

一般には、新渡戸稲造の「武士道」という本がまるで武士道の基本のような扱いを受けている。しかし、武士とは、彼の本に書かれたようなものとはいささか違う。

南部藩の下級士族の子弟に生まれた新渡戸稲造にとつては、武士道とはそのようなものであったかもしれないが、そもそも侍たちの間には、武士道という概念など存在してはいなかった。

アメリカに遊学した時、アメリカ人相手に書いたのがこの「武士道」という本である。

手元にあるPHP文庫版を読んでみた。引用された、主君の為にわが子を犠牲にする江戸期の武士の夫妻の物語。歌舞伎の主題ともなっている。

日本の武士の代表的精神風景としているが。新渡戸先生、いささか勉強不足である。

お隣中国では、是よりはるかに昔から、主人の為にわが子の命を差し出す物語が数多く作られている。無知なアメリカ人相手ならともかく、国内でこれを出版するとはね。

維新の後、俄かに成り上がった者が、自分らに箔をつける為に、こうしたまがい物の安っぽい思想を広めてしまった。

この旅行者は、異国の異民族文化が容易くは受け入れられない。係官は、強引に押し付けようとする。

維新のち日本に入ってきた西欧思想は、瞬く間に広まってしまった。「官」が強引に推し進めたせいもある。

こうして明治の初期に、武家の思想は葬られた

のである。

武士のことなどほとんど解らない人間が脚本を書くから、つまらないものが出来上がる。

〈トランプ〉

ドナルド・トランプ氏は、イスラエルロビーに尻を叩かれたのかして、流行りのドローンとやらの無人攻撃機でイラクを爆撃、訪問中のイラン革命防衛隊司令官を殺害。巻き添えでイラク高官も死亡している。イラン国内では、一気に反米の火の手が上がった。反政府運動が激化しているなか、イラン政権にとつては追い風となった。けれど直後に、ウクライナの民間航空機を撃墜してしまった。安倍政権は、中東海域に護衛艦とP3Cを派遣とか。ホルムズ海峡波高し。

世界の核戦争の危険度を示す「世界時計」は、今年、史上最短の100秒となった。

神話の始まり。

歌舞伎にしても、能にしても、ファンには申し訳ないが、少しもいいとは思わない。何度見ても、その良さというものが少しもわからないのはどうしてだろうか。謡曲、謡いなども全くよさがわからない。

古くからの伝統芸能だというが、江戸中期に始まった娯楽物だ。

「風の谷のナウシカ」、「スター・ウォーズ」

これが歌舞伎？なの？借り物の、ただの現代劇じゃあないか。独自性などカケラもない。

二枚目俳優だというが、石岡の高校生にはもつ

とイケメンが大勢いる。

始りの記憶。

これはもう確かめようがないが、妹が生まれた時の記憶。ピンクのタオルが使われたという事、それだけの記憶。まだ2歳だったのでほかの事は何も覚えていない。

もしかすると、記憶違いかもしれないが。

雲湧き 雨興る

漢語の、こういう表現がむかしから好きだ。

常陸國風土記、常陸國誌などに出てくる、鯨に見える丘、或いは鯨が打ち上げられた伝説は、古墳だったのではないのだろうか。或いは、鯨に似せて古墳を作ったものか。

「櫻を見る会」の騒動。漱石は時の総理大臣のパーティーへの招きを、有名な、

ほととぎす 廁なかばに 出かねたり
の一句でもって断っている。

招待状を貰うといそいそと出かける、いかにも尻の軽い人々。そもそもが、およそお花見という風流とは無縁の面々ばかりが参加している。

そういえばずっと以前に参加した花見は、イカ焼きの匂いとアルコールの匂いがあたりに充満していて、花の香りとは無縁のものだった。

都会の人間の思いがり、或いは、勘違い。

耕して天に至る、千枚田。多毎の月。アジア特有の風景。過酷な税を払うためにこうなった悲しい歴史。美しい風景の裏の現実。

おそらく今年も夏には猛暑と、台風によって、洪水や倒壊が起こるのだろう。ブルーシートに覆われた屋根の風景が、ほぼ当たり前の景色になってしまった。

今回もまた寄り道になってしまった。此の国と同じく、行方定めぬ漂流である。

今一度角材もて壊したき

市民不在のこのまつりごと

気が付けば 半世紀経ちており

かつての闘士 今那边

歲月者残酷 闘士者老残

天下曝醜態 歲月不待人

醜態而天下

ナイキのシューズが、スポーツ界で問題になっている。

厚底で高反発の素材によって長距離ランナーが多用し、記録が出ている。国際陸連はここへきて、公平性の観点から疑問視しているのだろうか。一度履くと駄目になってしまおうという、単価30K 以上もするこの靴は、途上国の選手には高くても手が出ないだろう。

日々、原稿を書いてはいるが果たして何人の人間がこの文章を読んで呉れているのか。

勿論知人は褒めてはくれるが、知りたいのは、この営為が果たしていくらかでも影響力或いは説得力を持つかという事。いやその前にそもそも書くこと自体不毛なのではないかという思いが常にある。始めから、ずっとその思いは付きまとい

いる。

こつそりと 羊糞受け取り 露見して

雲隠れにし 議員会館

不都合で すぐに駆け込む 病ダレ

田舎暮らしと称して、都会から移住してくる者たちがいる。田舎の風景や自然、素朴な人情など移住の同期は様々だろう。

それを見ていて感じた。ここに一つの問題は、都会人のエゴイズム。都会の便利な暮らしをそのままに地方の田舎に実現しようとする。これはそもそも無理な話なわけだ。まさに、木に竹を接ぐ様なもの。

現代の選択肢は二つしかない。

都会で便利ではあるが、環境に汚染された生活をするか、田舎で不便だけれど、きれいな空気を吸うか。

いいところは許されない、という事を理解しないと、たぶんうまくゆかない。

不便だったり、保守的だったり、田舎というのは本来そうしたものだ。現実の壁にぶつかって、去っていくものもいる。行楽気分ではだめなのだ、ということがわかっていない。

せつかく漢字文化圏があるというのに、それぞれの国の思惑で、廃止したり、簡略化したり、それぞれバラバラであるため、かつてのような共通の言語によるコミュニケーションは失われてしまった。

オリンピック委員会の竹田元会長は、疑惑が広

がる前にさつさと辞職。IOCの不透明な資金の流れは、関係者が各国の要人が多くいるため、操作もおそらく尻すばみ。

中国から輸入した文化や習俗で日本に定着しなかったもの。

「科挙」

「纏足」

「宦官」

「道教」

「辮髪」 これは清朝の習俗

「女子の髪飾り、大袈裟」

「冠」これは王侯貴族と神官だけに

TVを見てみると、やたらと宝くじのCMが多い。どうやら、あまり売れていないようだ。収益が苦しくなっているように見える。

ロト、スポーツくじ、スクラッチくじ。当りやあしないのがほぼわかってきたから売れ行きも下がっているだろう。

ニュースは、グダグダと余計な経過を説明して、肝心の本題に入ると時間切れ。

中国の新型ウイルスについては、インタビューに答えていたおぼはんが、もつと厳しい対応をしると息巻いていた。

再度書くが、ウイルスのような微細な病原体は、市販のすきまだらけのマスクなどでは防げない。N95という医療用のマスクやそれこそ、核の防護服のようなものを着ないと感染を防ぐことは難しい。

ワイドショウなどでは、そうしたことをはつきりと言う人間がない。

どうしてそんなに早く文章を書くことができるの？と聞かれる。確かにパソコンを使えば、いちいち手書きするより数倍は約原稿を書くことができる。

けれど、いざ書きだすまでには長い時間頭の中で文章を組立、解体しまた組立、野々をしている。それが、十枚足らずの原稿に結晶する。



【風の談話室】

《読者投稿》

やまゆき歩(49)

やま女

最近、何日も続く強風（西風）が脅威です！ 辺りが黄色く霞むようで、クシヤミ鼻水が止まりません？一年のうちで最も嫌な季節がやってきた？

・散歩の楽しみの一つ、山羊牧場で一休み。筑波山の夕焼けを眺めながらのヤギさんとのふれあい。途中摘み取った青草を持って、近づくと一斉に土手を駆け上って来て美味しそうに食べます。ヤギ達に元気をもらってもうひと歩き、冷たい風の中

6キロ歩き夕方、早足で家路に着いた。
・昨日、夫が空を見上げて、あれッ！へんな雲

が・・・？空を見上げると筑波山から東の方に向かってへんな雲が流れていた。二人で地震雲かな？なんて言いながら散歩に出た。そして夜中10年ぶりの大地震？怖かったですね。やはりあの雲は地震雲だったのかな？幸いこのあたりに被害はなかったが、頭をよぎったのは、福島や東海村の原発のこと。一瞬この世も終わりかと思った。

・先週は春一番が吹き荒れ、その後も強風に悩まされた。我が家の作業小屋のビニールハウスが風で破れ、今日はビニールの張り替えです。田舎暮らしではこんなことで、一々業者さんに頼んでも居られず、中々の重労働ですが、張り替えの度にコツをつかんでいるようです。今回は遮熱シートも張りました。

・八郷に来た当時、村の集まりでは若い方で、皆さんに若くて良いね？なんて言われていたが、今では私より年上の方は数えるほど。考えると先々不安感がよぎるが、そんなこと考えても仕方がない。周りの皆さんと楽しい日々を送り、ウオーキング2年目を楽しみコロナに負けず過す。今日も6キロ程歩き、筑波山の向こうに日が沈み、刻々と空が赤く染まって来た。家に帰り、誕生日祝いにいただいた手作りケーキで今日の無事を感謝した。

◎多くの方から祝いが・・・
お誕生日おめでとございます。お元気に色々な事にチャレンジして楽しくお過ごしください。スペインへご一緒出来る日に備え、引き続き足腰鍛えましょう。

・ありがとうございます。御座います。長年の夢が叶いますよう足腰鍛えます。

お誕生日おめでとうございます。お互いに56

7に負けず元気で毎日過ごしてくださいね。

・ありがとうございます。Hさんのパワー目指して頑張ります。

誕生日おめでとうございます。FB拝見しています。毎日のウォーキング途中での風景など楽しみにしています。

・ありがとうございます。ウォーキング2年目今年も発信して行きます。見て頂きありがとうございます。

・昨日は北風が吹き荒れ、とても寒い一日だった。知人の家に行く、この寒いにずっと道路際に座っているおじいさんがいるのだけど、大丈夫かなと・・・話題になった。そこにやって来た知人もおじいさんを心配して色々話していると、またまたやって来た知人が、あれは人形だよ・・・！みんな嘘つて言う思い。物好きな私は、強風の中歩いて見に行く、やはり人形だった。それにしてもよく出来ていた。

・後日友人から・・・私も見ました！いかにもくたびれた様子で座っているので、気になって車のスピードゆるめてじっと見てしまいました。

・車の中から見ると本当にお爺さんだよね。みんなに心配してもらって幸せなお爺さん？



茨城県の難読地名とその由来 (12)

木村進

葛生【かずろう】 古賀市(旧総和町)

角川日本国地名大辞典には「地名は、当地に住した郷土たちが荒地を開墾し真藤の根を掘り取って葛(くず)を製造し資材を作り上げたことによる」と書かれている。

しかし、「葛(くず)」には「崩れ(くずれ)」の意味もあるという。この地名としては「楠」、「木津」、「九頭龍」なども同じ意がある場合が多いようです。

日本全国の「葛生」地名を調べてみました。

茨城県以外にあったのは、栃木県佐野市葛生です。でもこちらは「くずう」と読みます。

この地区は「葛生石灰岩」といわれる石灰岩で有名な場所でした。またこの石灰石から大昔の人骨が発見されました。葛生(くずう) 原人と名付けられました。人骨かどうかにも疑問があるようです。

こちらの地名由来について佐野市のホームページには次の2つの説が載っていました。

一、万葉集の東歌の中に「上毛野安蘇山黒葛野(かみつけぬあそやまつらぬ)を広み延(は)ひにしものを何(あぜ)か絶えせむ」とあります。ここに上毛野とあるのは、上古は今の上野と下野は毛野国と違って一国であったが、仁徳天皇のころ上毛野と下毛野に分けられました。しかし、境界は一般には不分明であったため、誰の作ともわからず東国人の歌として万葉集に採録するとき、筆者がはつ

きり境界など気にせず下毛野を上毛野と書いたようにも考えられます。この歌の「まつら」は葛または藤など、つるを利用してひものように利用できる植物を意味している。「葛生の地名」の起りもこの辺から出たのではないかとわかっています。

二、クズ・フという地名で、クズは動詞クズレル(崩れる)の語幹で、山・崖などが崩れ落ちるの意味から、崩崖・崩壊地をいいます。フは「く」になっている所という地形名彙の語尾につくものなので、地名は崩崖地に由来するという説です。

どうでしょう。

古賀市葛生(かずろう)についても、この(二)の説「崩壊地」が語源と考えることもできるのではないかと思えます。

しかし「葛」を「くず」と読むと「かずろう」の読みが出てきません。

この読みについては次の地名が参考になりました。日光に「葛老山(かずろうさん)」という山があります。

「葛」は「くず」とも読みますが、四国のかずら橋などの蔓||葛||かずらと読みます。

このため「葛生」↓「かずらう」↓「かずろう」となったものと思われます。

この読みから考えると「崩れる」意味ではなくやはり「蔓状」の「かずら」||葛が語源なのでしょう。

しかし、日光の葛生山(標高1124m)は1683年

の日光大地震で崩れて、ほとんどなくなってしまう山で、この崩壊の土砂が川をせき止めてできた湖が「五十里湖」です。

ということは、「崩れる」意味かもしれないですね。

最後に東京都葛飾区の「葛飾(かつしか)」の由来も書いておきましょう。(Wikipediaより)

- (1) 葛の多く生えた「葛繁」の意とする説、
 - (2) 「かつ」は崖、「しか」は砂洲とする説、
 - (3) 「かとしき(門敷)」の転化で、古利根川下流の入江の門戸の低湿地を整備して、集落が立地したことによるとする説、
 - (4) 「方洲処(かたすか)」で、一方が砂地の所とする説、
- その他にもまだいろいろの説があるようです。

行方、行里川、行田

行方 【なめがた】【なめかた】 行方市

行里川 【なめりかわ】 石岡市

行田 【なめだ】 下妻市

行方市(なめがたし)は、茨城の方は大概の方が読める地名だが、その他の地域の方はほとんどが読めない。その名前の由来については、多くの方が常陸国風土記に書かれている由来を信じて疑わない。

まあ8世紀初頭にまとめられた風土記であるので、そこに書かれているのだからまあ信じてみようように思うのだが、これも不思議なものだ。少し検証してみたい。

常陸国風土記の行方(なめかた)郡の条の内容を口語訳で概略を記しておきましょう。

まず、行方郡の成り立ちについては、白雉四年

(653)に、茨城の国造である壬生連麿(みぶのむらじまろ)と、那珂の国造である壬生直夫(みぶのあたひをのこら)が申し出て、茨城と那珂の郡からそれぞれ八里と七里(合計15里、約700戸)を提供して行方郡としたと書かれています。

そして倭武の天皇(ヤマトタケル)が現原(あらはら)の丘に上って四方を眺めて「車を降りて歩きつつ眺める景色は、山の尾根も海の入江も、互ひ違ひに交はり、うねうねと曲がりくねっている。峰の頂にかかる雲も、谷に向かって沈む霧も、見事な配置で並べられていて、繊細な(くはしい)美しさがある。だからこの国の名を、行細(なめくはし)と呼ぼう」とおっしゃったと書かれています。

常陸国風土記には行方の名前の由来が「なめくわし」だと書かれています。

でもこれは続いて書かれている、「小舟に乗って川を上られたとき、棹楫が折れてしまった。よってその川を無梶河(かぢなしがは)といふ。」といわれるように、今の「梶無川(かぢなしがわ)」の名前の由来を述べていることと同列なのです。

きつともつと昔からこの地に「なめかた」と呼ばれる地名が存在したのだと思われれます。

縄文語を研究されている鈴木健さんの「常陸国風土記と古代地名」の中にこの「行方」について書かれた記事があります。

それによると鈴木さんはこの風土記に書かれている「行方」の由来説明はどう考えても「無理なこ

じつけ」だとされています。そして古代アイヌ語(縄文語)で「泉のほとり」「泉の上」の意であろうと述べています。

行方市の湖岸近くにヤマトタケル伝説の地として「玉清井(たまきよい)」と呼ばれるわき水の池(泉)があります。この池の上に「井上」と名づけられた地域があり、「井上神社」という古社があります。この井上もまさに縄文語で言う「行方」と同じ意味になるといいます。

行方⇨冷泉の上⇨井上 というわけです。

もう2ヶ所茨城県には「行」⇨「なめ」と読ませる地名が存在します。

石岡市の旧水戸街道の杉並木の端「行里川」【なめりかわ】と、下妻市の「行田村」【なめだむら】です。

★行里川(なめりかわ)

角川および平凡社の地名辞典にはこの地名の解説はないが、「石岡の地名」(石岡市教育委員会編)(平成8年10月出版)によれば、江戸後期にはみられる地名だが、諸説として、この地の北境に園部川が流れるが、この川を昔は滑川と言ったとあり、この部落も滑川と呼ばれた、滑川の起こりは新誌(新常陸国誌)に平常土人の之の川を徒歩するに河底深く滑らかにして転倒の恐れあり、故に滑川を以て名とするなるべしと、江戸重通が大掾清幹にやぶれたもの之の川の橋が破壊され渡り難くされた事が大きな原因であったと言われているような滑る川であったようである。・・・など書かれています。

まあこれほどか自己満足的な書き方に見えなく

もないでしょう。

★行田（なめだ）

角川日本地名大辞典では下妻市の「行田村（なめだむら）は江戸期から明治11年まで使われていた地名で、古くは滑田と書き、語源は、毛野川（現在の鬼怒川）流域の肥沃で滑らかな田の意という（下妻近傍地名考）と書かれています。

日立市には「滑川」がありますので、「行（なめ）」
Ⅱ「滑（なめ）」という解釈もあるのでしょうか。
行方を除いて昔は「滑」の字を使っていたらしいが、「行」に変えたのは、この行方の読みが影響しているようです。どこか品が良いと感じて漢字を変えたというのが当たっているのかもしれませんが。

★行を「なめ」と読む地名

- ・山形県鶴岡市行沢（なめざわ）
- ・山形県尾花沢市行沢（なめざわ）
- ・福島県南相馬市小高区行津（なめづ）
- ・茨城県石岡市行里川（なめりかわ）
- ・茨城県行方市（なめがたし）
- ・群馬県富岡市妙義町行沢（なめざわ）
- ・千葉県勝浦市浜行川（なめがわ） 行川アイランド
- ・千葉県いすみ市行川（なめがわ）
- ・神奈川県茅ヶ崎市行谷（なめがや）
- ・高知県高知市行川（なめがわ）



常陸旧地考（9）

下巻（二）

菊地孝夫

○大洗磯前薬師菩薩明神社 おおあらいいそさきやくしほさつ

神名帳に常陸國鹿島郡に二座。大洗磯前薬師菩薩明神社「大明神」。

國誌にいま按ずるに、大洗磯前社は茨城郡に属したるは蓋し後人の所為なり、云々とあり、国郡古圖にこのあたりを総て茨城郡に属したるは誤りなり。今なお鹿島郡なり。即ち磯浜村の大洗明神これなり。

文徳実録に、齋衝三年（856）十二月戊戌、常陸國こと揚げて鹿島郡の大洗磯前に神有り。新たに初めて降り、郡民の海を煮て塩と為す者、夜半に海を望み、光り輝く天につきて、よくじつ、二つの降り石あり。水のほとりにあるのを見る。高さそれぞれ尺ばかり。神造の体する。人間（じんかん）の石にあらず。塩の翁は秘かに是を訝しんだ。その地に一日、また、二十余りの小石、先の石の左右に在り。待坐するが如きに似ている。彩色常にあらず。沙門のかたちで、ただ耳目なし。時に、人に依つていう、我は是、大奈母知少彦名命なり。昔この国を作り、去つて東海に往き、民祀り、しかなして更にまた還る、云々。また同書に、天安元年（857）八月乙丑朔辛未、常陸國に在る大洗磯前、酒烈磯前等の神を官社に預け、云々。また十月、巳卯、常陸國にある大洗磯前、酒烈磯前両神、薬師菩薩明神と号す、云々。

國誌を按ずるに、明神は大日貴命、少彦名命な

し、即ち何又薬師菩薩の号あらんや。菩薩の号は蓋し、二神は本朝に初めて、医术を教え給える神ゆえ、浮屠氏でその名の似ているのを以て、附託して愚民を欺きのべ朝廷に及ぶ。

本居翁の、玉勝間に、大洗磯前、酒烈磯前両神は、薬師菩薩明神と号す云々と見えたる薬師は、「くすし」と読むべし。薬の神のよしなり。かのやくしという仏の名をとるのではない、云々、といえるはまことにしかり。さてまた菩薩と言えは、なお仏に因りたる名にて、相応しからず。されば早くに國誌にも言いおき給えり。

菩薩は、翻訳名義集に、肇の曰く、正音は、菩提薩埵という。菩提は仏道の名なり。菩提は秦には大心衆生という、大心あり。仏道に入り、名を菩提薩埵と正名訳したなり。安師の言う、開土、始土、荊溪、ときあかしていう。心は初めて開く故に、初めて発心。故に浄名の疏に、古本には翻め高土と為す。既に異翻ありて、不定なり。梵音を留め須く。但し、諸師不同なり。今大論に依ると菩提を釈、佛道と名付け、薩埵を衆生と名を成す。天台解にいう、諸仏道を用いて、衆生を成就す、ゆえに名を菩提薩埵という。また、菩提は、これ自行、薩埵はこれか、他自、仏道を修めまた化すか、他ゆえなり。

賢首のいう、菩提これには、是覺りという。菩薩これには衆生と曰く、智を以て上に菩提を求め、悲を用い下に衆生を救う、云々、などと見える。さて、按ずるに、当時世の人皆、菩薩という事を、上もなく尊きことにして神にも名づけ給いしものなり。

いまの世の俗にも、米粒を菩薩と言う。米は人

の命を続けて、上もなく尊きもの成ればなり。

礪前の菩薩の名もこれと同じく、尊き神のよし、あながち仏の名を取れるにはあらず。

また玉勝間に、この大洗礪前あたりは、大方十里ばかりが程総て石無き国だけれども、今も年ごと一夜の間にこの崎にここの石の寄るのを、正月の一六日に民どもが取つて、常に使うに足らざることなし。これこの二柱神の而して、民に与え給うなりと言ひ伝えたり、とかの国人語りき、云々、と言えるは誤りなり。かかることは、大洗にも酒烈にも、言ひ伝えには全く無い。故に按ずるに、これは下総国飯岡村の事を誤つて大洗と語つたものだろう。

茲に国人と言ふのは、同じ常陸國ながらも、大洗とは界隔たる所の人なるべし。

さて、飯岡村の鎮守神を、里人は飯岡権現と称える、この神の掟が在つて、毎年正月十六日に(石を)取ること、今の現在にあることなり。これを採れば、その夜一夜に元のごとく石がより来て、尽きることなくて、珍しい事ではないか。これはここに用無きことではあるが翁の説は、人が皆信用するゆえに、遠国人などは、げにと諾いて誤りをのちに伝えることを憂い記しぬ。

* 翻訳名義集 未詳

○大國玉神社

神名帳に真壁郡一座に大國玉神社あり。今なお真壁郡大國玉村大國玉明神これなり。里人は村名をオクタマと呼び、神をもそのように言う。社伝に、祭神大穴牟遲神なりと言ひ伝える。大穴牟遲神の別名大國玉神という。

續日本後記に承和四年(837)三月戊子、常

陸國、云々。真壁郡大國玉神並官社に預る。このうち特に靈驗あるを以てなり、云々。また一二年(845)七月辛未、常陸國無位大國玉神從五位下授ける云々とみえる。

大國玉神というのは諸國に在り。

神名帳に、山城國久世郡水主座山背大國魂命神、和泉國日根郡國玉神社、摂津國東正郡國魂神社、兎原郡河内國玉神社、伊勢國度会郡大國玉比賣神社、尾張國中島郡尾張大國魂神社、遠江國岩田郡淡海國玉神社、能登國能登郡能都生國魂比古神社、對馬上縣郡大國珠神社など、斯くその國のところに、経営の功德在りし神をこのように申して祀れるなり。

右のほかにも、國々に國玉神社、大國玉神社というもの多く、みな同じ。その中には大穴牟遲命を祝えるものもある、云々。以上古事記伝の説なり。

さてこの常陸國なるは、社伝に大穴牟遲命なりと言ひ伝えたれば、この神なるべし。

○楯縫神社 たてぬい

神名帳に信太郡二座〔小併〕楯縫神社あり。

國誌に、信太郡にあり、今その在る所を知らず。

またその何神なるか考えず、云々とみえたる。當時早く衰えて世にも知られなくなった故に、尋ね漏らしなるべし。

いま、信太郡の木原村の鎮守神をこの神社也と言ひ伝、里人木原の大杉とたとえて、とても大きい楯が有り、木綿一端回ると言う。社の様もものさびて、いと尊し、

社伝に、祭神彦佐知命と言ひ伝える。

神代記には彦佐知命楯縫人と見える。

楯縫ということは、出雲風土記に楯縫郡条に、いわゆる楯縫と名付ける故、楯縫は神魂命、詔、五十足天日栖宮ノ縦横御量り、千尋、柁繩持ち、百結び八十結び、しかしてこの天御量を持つて天下造所大神の宮を造り奉り、のり賜いき、御子天御鳥命、楯部として天降りしたまいき。その時、天下がり来て、大神の宮の御装束の楯造り始め賜いし所なり。

彼今に至つて、楯、鉾を作り、皇神らに奉りしゆえ、楯縫という、云々と見える。

神名帳に、丹波國氷上郡楯縫神社、また但馬國養父郡楯縫神社あり同神であろう。

○阿彌神社 あみ

神名帳に信太郡二座〔小並〕阿彌神社あり。

和名鈔に信太郡阿彌〔今の本には彌を称と誤れり〕郷あつていまなお信太郡阿彌村の鎮守神をこれなりと言ひ伝える。

國誌に「信太郡今不知其在所又未考其為何神」云々とあるのは尋ね漏らしであろう。

いま高來村の鎮守に阿彌神社といえる額を架けている。これは近頃、争論になつて、出入りというものになつて、安見村の方は力ならずして負けてしまった。それより、高來村の鎮守に阿彌神社の額を架けるようになった。

さてこの高來村の鎮守は、風土記信太郡の条に高來里は、古老曰く、天地の始め草木言語の時、天下り来たる神の名を普都大神という。芦原中ツ國を巡り、山河荒ぶる神の類をむけやはれたまいき。大神こと向け〔俗に言う伊門乃〕鎧鉾楯剣を取り、玉みな抜いて、この地にとどめ置き、則ち、白雲に乗つて天に登り帰りし、云々と見えて、い

と尊き御神なり。
斯く確かに風土記に伝わりたれば、神名帳に載らずとて何のあかぬことかあらん。
阿彌神社を争論したのはいかなることか神の御心にも叶わない。
安見村の社伝に祭神豊城入彦命といえる。



角のある蛇「夜刀神」説話

木村 進

むかしむかしのことです。

第26代天皇の継体天皇の代(西暦507年～531年)頃のお話です。

これは、今から1300年ほど前に「常陸国風土記」の行方郡のところ、古老から伝えられた話として書かれています。

むかしむかし、継体天皇の御世に、石村(いわれ)の玉穂(たまほ)の宮に、箭括(やはらず)の氏の麻多智(またち)という人物がいた。

この人物が、郡の西側の谷津(やつ)の葦原を開墾して新たに田を切り開いた。

しかし、このとき、夜刀(やど)の神とよばれる

頭に角がある蛇が群れをなして現われ、田作りの邪魔をして耕作が進まなかった。
この夜刀の神については、この夜刀の神の難を免れようと逃る時、振り返ってその姿を見た者は、その後一家は滅び、子孫までも皆絶えてしまうという。

そこで、箭括の麻多智は大いに怒り、甲鎧を身につけ、この夜刀を打殺し、山の入口まで駆逐して攻めていった。そしてこの境の堀に標(しるし)の杖を立てて、夜刀の神に向かって言った。

「ここより上の山をあなたたち神の住みかとし、下の里を人の作れる田としよう。」

今日から私はここで、神司(かむづかき)となつて、子孫の代まであなたがた神を敬ひ、お祭り申し上げますので、どうか祟つたり恨んだりしないでください。」

その後ここに社を設けて、最初の祭を行った。それ以来、この麻多智(またち)の子孫は、今日に至るまで代々この祭を絶やすことなく引き継ぎ、新田も更に増え、十町あまりが開墾されている。

その後、孝徳天皇の御世(西暦596～654年)になつて、壬生連麿がこの谷を支配する事となり、この谷津にある池に堤を築いた。

そのとき、夜刀の神が、この池のほとりにある椎の木に登り群れて、なかなかそこを去らなかつた。このため壬生連麿は怒つて、

「この池の堤を築くのは、民を活かすためでございます。あなたがたは、何の神、誰の神かはわかり申さぬが、詔をお聞きください。」と大声で叫び、

労役に駆り出されていた人々に「目に見える魚でも虫でも、反抗する者があれば遠慮なく全て打ち殺せ」と命じたところ、夜刀神は恐れをなしてみな逃げだした。

その池は、今は椎井の池と呼ばれ、池のまわりに椎の木がある。ここは香島(鹿島神宮)への陸路の駅道である。

さて、このお話の舞台である「椎井の池」と夜刀の神を祀る神社へ行ってきた。

玉造から国道354号線で鹿行大橋方面に少し進み新しく出来た玉造小学校の入口案内から右に折れ、すぐに左にまた曲がって、国道沿いの道をすすみます。

この右手の住宅や畑などが広がる地帯が「泉区」で、この椎井の池に関係する地域です。

しばらく進むと「泉区浄水場」があり、ここに「夜刀神社・愛宕神社」の矢印看板が出ています。

この案内板に従つて右折すると、道はどんどん谷の方に向かっていきます。

そして、しばらく行くと、また右へのT字路があり、ここにも同じ案内板があります。

道は更に谷底のような場所へ降りていきます。

この看板からはすぐで、「椎井の池」にです。脇に数台停められる駐車場があります。

椎井の池には鳥居があり、池は湧き水がこんこんと流れています。

この池の奥にはいかにも角のある蛇が出てきそうな山で、昔の(神社)祠も置かれています。

この椎井の池を祀る神社がこの池の脇から上に登った所にあります。



椎井の池

昔、夜刀の神がたむろしていたという椎の木らしき木も池のわきにはあります。少し滑りそうな山道を息を切らして登ります。やっと上に神社の建物が見えてきました。愛宕神社です。この愛宕神社の直ぐ右側の奥に「夜刀神」を祀る神社があります。



「夜刀神」を祀る神社

この近くを、恐らく常陸国国府（現石岡）から鹿

島神宮への官道が普通通りであり、この近くに駅屋（うまや）があったようですので、この池の水は駅屋の馬の水として貴重なものだったと考えられます。

この池の神社の山と反対側にも上る道があります。車ではいけませんので、回りこんで向こう側の上へ行って見ました。

住宅や広々とした平地が広がっていて、この椎井池への降り口には神社の鳥居が置かれています。

この突き当りの鳥居から下へ、降りた所に椎井の池があります。

そして鳥居の右側に道祖神が祀られています。年代は、江戸末期から明治時代のもが多いようです。

泉地区の婦人会などで、子安講などが行われてきたようです。

この常陸国風土記の説話は、いろいろ解釈ができますが、大和朝廷がこの地を開拓し、支配を広げていったときはなしとして考えると、その支配の過程がこの話しの根底に隠されているように感じます。

最初の箭括麻多智（やはすのまたち）は、現地の族の長と考えられ、その後の壬生連麿は、箭括麻多智（やはすのまたち）の開墾した谷戸（やと）田（谷水田）に民を動員して、夜刀神（やとのかみ）（蛇の神格化）を打ち殺しつつ大規模な開発を行い、溜池（ためいけ）を築いて安定した耕地を開いた人物で、茨城国造（いばらきのくにのみやつこ）と考えられています。

夜刀神も恐らく、箭括麻多智（やはすのまたち）と

同じ、昔この地に暮らしていた一族（縄文人）を指していると考えられます。

この人物の名前も、ヤハズは矢筈・矢の弦にかけられる切れ込みのあるところ、マタチは、ヤマタのヲロチと同じくマタのある蛇の意ではないかという解釈もあります。

夜刀の神も、この谷底にいた、もつとも怖い妖怪と考えてもよし、また、ヤマタノオロチ伝説のヤマタノオロチと同じように見ることも出来ます。

しかし、古事記や日本書紀の神話の世界を引き継いだ風土記も、書かれた当時は東北地方はまだ蝦夷地で、朝廷の意向を汲む同じ流れで纏められたものです。

しかし私には、この風土記の作者は、少しそこにこっそりとこの地の開拓や、現地人たちとの衝突など、それまでの時代の流れを書き留めているように感じます。

白鳥の里と角折浜の説話

木村 進

もう一つ気になる常陸国風土記に記載されているお話をしておきたいと思えます。

鹿島郡の郡家の北三十里のところ、白鳥の里というところがあります。

第11代天皇の垂仁天皇の代（紀元前29年〜紀元後71年??）頃のお話です。

あるとき、天より飛来した白鳥の一群がありました。

白鳥たちは、朝に地上に舞ひ降りて来て、乙女の

姿になり、石を拾い集めては水をせき止めて、池の堤を少しづつ築き、夕方になると、また白鳥の姿にもどり、天へと帰っていくのでした。

しかし、池の堤は、少し築いてはすぐ崩れて、いたづらに月日はかさむばかりでなかなか池の堤は完成できませんでした。

そうしてこの白鳥たちは、

「白鳥の 羽が堤を つつむとも あらふ真白き羽壊え」

(小石を集めて池の堤を作らうとしても、白鳥の羽を抜いて積み上げるようなもので、この真白き羽はすっかり損はれてしまった。)

と歌いながら天に舞ひ昇り、ふたたび舞ひ降りてくることはありませんでした。

この謂れにより、白鳥の里と名付けられました。また、この里の南に広がる平原を、角折の浜といえます。

この名前の由来は、昔、このあたりに頭に角のある大きな蛇がいて、東の海に出たいと思い、この浜に穴を掘って通らうとしました。しかし、蛇の角が折れてしまったので、そこから名付けられたものです。

また別の言い伝えによると、昔ヤマトタケル尊がこの浜辺に宿をとったとき、食事を供へようとしたが、水がなかったため、鹿の角で地を掘つたら角が折れてしまったともいう。

さて、この話は第11代天皇の垂仁天皇の頃に池を造るといってお話です。

垂仁天皇(すいにんてんのう)は実在した可能性

が高い天皇と考えられてもいますが、紀元前の生まれではなく、時代としてはもう少し後になりそうです。

垂仁天皇は崇神天皇の3番目の子供で、大和朝廷の生産力の拡充や、新羅などとの交流も積極的に行ったと言われています。

特に水田開発を熱心に行い、諸国に800余りの池・溝を作りました。

この白鳥伝説も、白鳥や乙女を美化した話ではなく、水田に使う水を貯める池の構築が、かなりの難事業であったことを物語る話としてみると、内容が少しわかってくるように思います。

また、垂仁天皇は天皇などが亡くなった時に、人の殉死などの風習があったのを排除し、代わりに埴輪を使うことをはじめたとされています。

また、夜刀神の時代よりさらに200年ほど前の話と捉えようと、角折浜の話は、九州方面から黒潮に乗って千葉や茨城の浜にやってきた海人族(縄文人)とはまた別な、内陸の川や山に住む縄文人の一族を指しているのかもしれない。東の海に出ようと砂浜に穴を掘って進んだけれど、角が折れてしまった……とてもいろいろな事が想像される話に思えます。

この白鳥の里ですが、旧太陽村(現銚田市)の中居あたりではないかとされています。

というのもこの中居地区の西側の霞ヶ浦北浦近くには「白鳥西小学校、東側の鹿島灘近くには「白鳥東小学校」があります。

遺称地として、地元などに看板などがある場所は、この中居に「白鳥山大光寺照明院」という天台宗

のお寺があります。寺は無住で、人の気配はない。



白鳥山大光寺照明院

寺の入り口に置かれている石像はほとんどが子安観音像で女人講中などの文字が読めるが年代はよく読めない。

一番手前には文政11年(1828)の銘がある念仏供養塔である。

もう一つが、北浦に架かる鹿行大橋に近い札村の「白鳥山普門寺」である。



白鳥山普門寺 白鳥観音堂

こちらも昔訪れた時の写真だが、忘れ去られたよ

うに残されていた「白鳥観音堂」が印象的だった。

この札村は芭蕉の禪の師である「仏頂禪師」が江戸初期の1642年2月18日に生まれている。

仏頂禪師は、大田原の雲巖寺裏の山の草庵で禪の修行をしたといわれる。

その後潮来の根本寺の住職をしていた。寺領の争いのため、江戸を訪れていたときに芭蕉と知り合った。また、小林一茶が1817年5月に鹿島詣での途中に、この地を訪れている。

いろいろあるが、今この地を訪れる人はあまりいないようだ。

常陸国風土記では鹿島郡の郡家から北三十里と書かれているが、現在郡家跡とされる場所は鹿島神宮の南側にあり、三十里よりは大分遠いように思う。しかし、郡家がこの地に移る前に神宮の北「沼尾神社」付近にあったと考えれば、記述とさほど違わない。

もう一つ「角折」ですが、これも現在「はまなす潮騒公園」の東側の海岸付近に「角折」地名が残されています。

こちらの公園はハマナスの南限地といわれ、この名前がつけました。

ここには鹿島灘で塩汲みから財を成したという出世話が室町時代の「御伽草子」に書かれています。御伽草子の最初にてでくる「文正（ふんしやう）草紙」がそれです。



【特別企画】

打田昇三の太平記（7）巻第三・2

○主上、笠置御没落の事

「しゅじよう、かさぎをこぼつらくのこと」と読むらしいが、現代的に言えば天皇が笠置から逃亡した、と言うことである。難攻不落を誇った笠置城も幕府軍に攻められて簡単に落城したのであるから天皇でも大王でも逃げる他は無い。

落城の前に、風を利用して潜入した幕府軍の陶山藤三らが火を点けたから飯の皇居も焼かれた。

後醍醐天皇以下従う公家たちは辛うじて落城前に脱出することが出来たけれども、行く当てが全く無い。嵐の暗闇に敵軍の目を盗んで火事場から逃れて来たのであるから着替えも無く裸足である。最初の数百メートルは天皇を助けて前後に供をしていた久下たちも、風雨の激しい暗闇で更に敵勢力が追跡してくる中では自分の身を守るのが精一杯で散り散りになり、気が付けば天皇と藤原藤房・季房の三名が、見知らぬ場所に呆然としていたのである。原文に「玉体を田夫野人の形に替えさせ給い」とあるから念の為に天皇も衣装替えして庶民の姿で幕府軍の追及を逃れたのであろう。

行く先と言えば楠木正成の赤坂城を頼る他は無いのだが数十キロは有りそうで、現金は持っていないからタクシーも頼めない。原本に「夜の明けない中に赤坂城へ」と書いてあるが無理である。歩いて行くにしても当時の天皇は普段でも足は余り使わないから「一步歩いて二歩休む」と言った有り様なので、陽の有る中は人目を避けて草の中

に隠れ、夜になって夜露の草原を進むしかない。

当然ながら食事も幕府の目を避けて調達しなければならず、天皇には何とか与えていたのだが藤房らは三日間も食べて居なかった。其の夜は天候が悪かったので岩の陰で休んでいるほかは無い。切羽詰まった状況だが、食事をした天皇だけは元気に歌など詠んだ。

「さして行く笠置の山を出でしより

空腹の藤房は歌どころでは無いのだが、仕方なく

「いかにせん憑（たの）む陰とて立ち依れば
なほ袖濡らす松の下露」

と歌で答えた。それが原因では無いけれども幕府軍に追われているのであるから、程なく地元の武士である深須入道と松井蔵人の両名に発見されてしまう。後醍醐天皇は恐ろしい顔で発見者を睨み「お前たちに良心が有るのなら、天皇に協力して其の恩恵に浴し将来の栄華を望め！」と虫の良い提案をした。深須入道は其の気になったのが松井の気持ちが読めないので黙っていた。

発見した敵が天皇という大物なので連行するにしても何か乗り物が必要である。深須らは近くの宿場で粗末な輿を探してきて天皇を乗せ奈良の幕府出張所へ送った。其の状態は古代中国の王が合戦に負けて敵に捕らえられたとされる伝説の物語を想わせる気の毒なもので、是を見聞きした人々の涙を誘ったのである。此の時に角地に潜伏或いは逃亡していた人々、つまり「反幕府・天皇系の人々」も次々と逮捕されてしまった。

先ず、後醍醐天皇の息子二人、高級僧侶では峰僧正及び東南院聖尋、公家で萬里小路大納言こと藤原宣房、花山院大納言こと藤原師賢、按察（あ

ぜち) 大納言こと藤原公敏、源中納言具行、侍從中納言藤原藤房ら八名、さらに宮廷で高い官職に就いていた七名の官僚、武士、僧侶など合計六十一名と、其の家来など数え切れない連中である。

此の者たちは後醍醐天皇の周りにウロウロして威張っていたのだが、今は幕府への反抗を企てた罪人として鶏のように籠に押し込まれ、或いは裸馬に乗せられて京都市中を引き回しの上、幕府庁舎内の牢獄に送られて行った。更に十月二日には六波羅の幕府責任者・常葉駿河守範貞が三千余騎で京都市中を警備する中、捕虜となった後醍醐天皇は宇治の平等院に送致された。

其の日、鎌倉から来ていた幕府代表の北条貞直らは宇治へ行き、捕虜の後醍醐に会って「先ず、三種の神器を持明院統の天皇に渡すように！」申し入れたのだが拒否された。藤原藤房が天皇の代弁をして「…三種の神器は皇位継承者が天から譲位される際に受けるものであり、四海に威を振るう逆臣が天下を掌握したとしても是を受けることは出来ない。更に此の度の遭難で神器は笠置山の本堂に安置した状態で脱出して来たり、持ち出しでも逃亡の途中で無くしたりした。辛うじて宝剣は持っているけれども、是は天皇が幕府方の武士に襲われた場合に自害される為に所持されているので絶対に渡すことは出来ない！」と、分かった様な分らない様な返事をしたので、幕府役人も諦める他は無く放っておいた。

更に翌日は天皇に六波羅の幕府出張所まで来て貰おうとしたところ、天皇が行幸する儀式に決められた行列が必要と言われ、幕府も仕方無く其れに合わせざるを得なかった。捕虜という自分の立場が理解できない偉い人は始末が悪い。余計な金

が掛かったのである。結局、平等院から六波羅へ三日間を費やして移動をした。天皇ではあるが幕府にとっては捕虜なので輿の周りは多くの幕府方武士に囲まれ、お伴の公家たちは罪人用の乗り物に収容され京都七条通りを連行されたのである。見物する一般市民も天皇が乗った囚人車は珍しいから大勢の見学者が集まった。周囲は武士団に囲まれているが、それは天皇の警護では無く囚人の警備であるから根本的に違う。

さすがに収容された先は牢獄では無いが豪華ホテルと言う訳にはいかない。時に時雨があり軒端に月影が見えた。囚人天皇は思わず歌を詠む。

住みなれぬ板屋の軒(のき)の村時雨

音を聞くにも袖はぬれけり

他にする事は無いのか!と言いたいところだが数日後に中宮(皇后)から琵琶が届いた。果物の枇杷ならともかく、豪華ではあるが留置所に楽器が届いても場違いなだけである。琵琶には次のような歌が添えられていた。

思ひやれ塵のみつるも四の弦(よつのお)に

払ひもあえず掛かる涙を

天皇は中宮に歌で返事をした。

涙ゆえ半(なか)ばの月は陰るとも

共に見し夜の影は忘れじ

暇(ひま)な天皇のことは放っておいて、天皇に味方した嫌疑で捕らえられた地位の有る者たちは六波羅に於いて幕府の裁判官に当る二名の検断(高橋刑部左衛門、糟谷三郎宗秋)から判決を言

い渡された。天皇の子二名は佐々木判官時信と長井左近大夫将監に、源中納言具行は筑後前司貞知に、東南院僧正は常陸前司時朝に預けられたが、後醍醐天皇に近侍していた藤原藤房と六条忠顕の二名は六波羅に留め置かれた。少し自由を与えて天皇の言動を聞き出す作戦である。

元弘元年(一一三二)十月九日、後醍醐天皇は諦めてと言うより万策尽きて「三種の神器」を持明院統(後深草天皇の系統)に移譲した。勿論、洩々であろうが、早くから渡しておけば余計な苦勞をしなくても済み、武士や庶民も無駄な争いに巻き込まれることが無かったのである。はつきり言わせて貰えれば、天皇が南朝でも北朝でも国民にはどうでも良いことで有り、皇族の我欲で国が乱れることは絶対に許せない行為である。

皇位継承の証拠となる三種の神器は、堀河大納言具親と日野中納言資名の両公家が受け取って新規開店した北朝系天皇家に送り届けた。是が現代の日本に続く天皇家である。したがって「大日本帝国は萬世一系」と言うのは誤りである。

元弘元年十月十三日、ようやくにして陽の目を見た新天皇(北朝の光厳天皇)は念願の内裏へ移って来た。当然だが、天皇の周りにうろつく公家や警護の武士などが南朝系から北朝系に一新されている。敗者となった旧南朝系の者たちは罪の有無に関わらず何か処罰を受けるのではないかと戦々恐々とした状態に置かれていた。「子(実)結んで陰(かげ)を成し、花落ちて枝を辞す」と言うが、窮乏と栄達が時を変え、栄光と恥辱が道を分ける。今に始まらぬ浮世だが現実には、其の事が起こっていたのである。

(続く)